

2010年

5月21日(金曜日) 夢の可能性へのシワを伸ばそう！今こそ新時代の経済財政パラダイムを - 真の財政再建とは -

平成22年5月21日(金曜日)

第1回全国若手政治家サミット弁論大会にて

<財政再建の必要性>

今、我が国は大変な財政赤字、国債の累積の状況の中、持続可能な国家財政、ひいては健全な我が国経済を将来とも推進していくためにも、財政再建の必要性が強く叫ばれています。直近のギリシャの例からみても、財政破綻が一国経済全体に大きな影響を及ぼすことは必定であり、我が国においても財政再建が喫緊の課題であります。

地方行政においても財政規律の維持の必要性は同様であり、私としても、今後ともしっかりと堅持していく。ただ、ここでは、日頃の行政運営から離れて、未来の国家再活性化のためには将来どうしても必要な国家の新しい経済財政のパラダイムについて訴求する。

<そもそも財政の健全化とは？>

まず、そもそも財政の健全化とは一体どういうことなのか、という原点に改めて立ち返って、この問題を考える。

例えば、一つの指標であるプライマリーバランス。

国債の追加的な累積を防ぐという意味では健全化の一つの指標だが、私が思うのは、プライマリーバランスが達成されたとして、それ以上は累積を増やさないということであっても、では、その時点で累積された国債のストックされた状況をそのままにしているのか、ということだ。当該時点での国債累積の水準がたとえ500兆であっても700兆であっても、1,000兆であっても、その規模如何にかかわらず、とにかく、追加的な累積さえとまればそれでいいのか。更なる止血をとめれば先の処方箋はなくていいのか？

それは決してそうではないはずで、必ずや適切発行に係る条理や道理があるはずだ。では仮に、「国債＝借金」だから、国債はいつか必ずゼロにしなければならないのか？はたまた、一定保有することとしても合理的なのか？そうであれば、保有する合理的な水準はどうか？

私は、このことを問いかけたい、知りたい。この本格的な政策論が、今ないのではないか？見当たらないことが問題だと思うのです。

<「国債」は国民にとっての資産でもある>

私は、このことを問いかけていく上で、しっかりと見つめ直したいことが一つありま

す。というのは、とっても大切なことに思うのが、「国債は、日本政府にとっては「借金」であるが、保有する国民にとっては大切な「資産」であること。」。国債は、保有する国民にとって、証券であり、資産であり、財産であります。そして、その累積された国債の資産としての規模の大きさが、国家経済の発展に肯定的な影響を与える面があるわけです。資産が大きければその分、消費も投資も進むわけですから。更には、国債発行の後、目的に沿って投資されれば更なる資産となる。一の借金に対し、倍増して二の資産が生まれるという面もある。このように、経済の発展のシステムの中に資産としての国債が肯定的に組み込まれている一面が明確にある。私は、国債のそんな富としての一面を見据えなければならない、忘れてはならないと思います。

そして、その上で大切なことは、当然、資産としての国債の機能を維持するためにも信用が担保されなければなりません。無論、無規律に発行していいわけではないことはいうまでもありません。しかしながら、更に大切なことは、信用とは、単に累積規模の大小だけに拠るのではなく、国家経済の規模や、これを支える総合的な技術力であったり、外貨獲得可能な対外貿易力、外貨の蓄積規模など、国家の基礎的な経済体力の大きさ、システムとしての強さなどとの関係で総合的に評価されるべきもので、それが信用の基盤であり力そのものであるということだ。すなわち、信用は、このような経済国力に相応しい国債の流通規模として適正範囲にあるかどうかで問われるべきであり、本来、はずであるということ。したがって、国債の流通規模や発行規模は、単純な黒字赤字の財政経営上の問題としてのみではなく、本来、国家の経済体力との関係において論じられるべきであり、国債の信用性に係る市場心理、市場行動のバックセオリーも、この関係も視野に入れたものでなければならない。あたかも大きくて内臓も頑丈な体躯に相応の血液量が必要であるように、累積が一見、大きく見えても、実は相対的にはそれを小さいものとするほどの圧倒的な経済体力があるのかもしれない、或いは累積の大きさに持ちこたえられない体力かもしれない、私は、国家のこれからの未来設計を展望していく上で、どうしても、その相対評価、すなわち、経済体力と国債流通、国債発行の規模の適正な関係についての新たな財政秩序、経済財政パラダイムこそが今、必要だと思う。

<今こそ、新時代の経済財政パラダイムを！>

私が訴えたいのは、そのような我々の経済体力との関係を経済学的に測定する具体的な評価システムが、今見当たらないのではないかと、ということである。単にプライマリーバランスの追加的な国債の累積を来たさないというだけではなくて、どこまで国債の累積が許されるのか、果たして保有しても信用が維持される累積の水準はどこなのか、その評価の条理、尺度を持っていなければ、どこまで国債を減らしていくことが真に経済的に合理的なのか不明のままであるのである。国債が資産として消費・投資を促す効果を有することからは、国債保有を少なくしすぎても逆に経済発展にプラスとならない。今、そういった真の経世済国への羅針盤がないのではないかと。このことが財政運営の展望の脆弱さの元凶ではないかとも思う。そして、羅針盤がないがゆえにも、やや

いたずらに、「国債＝借金」図式による単純な赤字解消一辺倒の議論のみが、その後の財政行動の展望のないままに強調されすぎているのではないか。赤字解消一辺倒の物理的に縮こまった話になりがちで未来の夢が語りにくい。経済ばかりが夢ではないのはもちろんですが、夢の可能性のシワを伸ばして日本の夢を広げたい。このために、今こそ、総合的・構造的な経済体力を評価し、かつ、長期的な展望を持った、真の経世済国への羅針盤となる新時代の体系的な財政パラダイムと財政行動が必要だ！

私は、未来の国家再活性化のためにも、単純な「国債＝借金」の図式に基づく、単なる赤字解消的、表層的な経営財政の考えから脱し、国家の経済体力に基づく定量的な評価システム、新たなパラダイムの構築を！そのためにまずは講学的な検討をしっかりと進めるべきである、といたい。

<国債を真の宝にかえる徳政令>

すなわち、話をまとめると、国債は政府にとっては借金であるが、国民にとっては資産である。他方で、もちろん野放図な発行はその価値を崩壊させ、許されるはずもない中で、国債が資産として活かされる、借金ではなく富へと替わっていく、理論的土俵、いわば「平成の徳政令」が今こそ必要だ。徳政令といったって何も借金をチャラにするとかということではなく、むしろ国債と言う借金に、新時代の羅針盤たる金づちをあてて制約と節度をしっかり加えつつ、打ち鍛えていくうちに、自然裏返してみれば、借金ではなく価値あるものへと打ち鍛えられている、富へと替わっていくんです。いわば枯れ木に花が咲く、咲いているのが見えるんです。今こそ、国債を宝に替えていく視点、いわば、枯れ木に花の「花咲かじいさんの目」が必要なのだ。そして、この目の力をしっかり支える律、経済体力ー国債規模関係の定量的な評価システムこそ、新たな経済財政パラダイムであり、借金を富に変える「宝」＝平成の徳政令なんです。

日本政府には借金が多いが、日本国民、日本国はすごい富力を持っています。ある意味でこれだけの国債を出しても経済システムが維持されるほどの信用力、それを支える経済国力、基礎体力・インフラ、富の力の膨大な蓄積を現在にいただいている。まず、このことに改めて気づき直すべきではないか。これらは国家の先人の皆さんがこれまで汗水流して人生を尽くして築いていただいたもの！私達は、まずは、借金、借金と悲観ばかりする前に、素晴らしい総合的な富力の宝を築きのこしていただいた先人の皆さんと国家への深い感謝から再出発し、既に膨大に満ちている富に気づき、宝として活かしていくのだ！そのために、今こそ、新たな経済財政パラダイムという新時代の徳政令が必要だ！